ベネズエラ人、北京にて日本語訳のドストエフスキーを読む

異邦人が邦訳を語る

マヌエル・アスアヘアラモ

◇◇

私はなぜか幼い頃からロシア文学の双璧、トルストイとドストエフスキーに些かの親しみを感じている。この親しみというのは特に彼らの作品を小学生の頃に読んだから、というわけでは決してない。ただ、世界文学を隈なく愛読した父の本棚には常にトルストイの『戦争と平和』とドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』が、文字通り肩を並べて置いてあることに気づいていたからだ。

『戦争と平和』というタイトルは単刀直入だから、内容はどんなものかは大体見当が付くのだか、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』はそんな簡単にはいかず、小説の筋や舞台などは予測できない上、その膨大なページ数に怯えた幼い私は開いて見ることさえしなかった。だがしかし、『カラマーゾフの兄弟』っていうタイトルの響きには、スペイン語の語感からすると威厳が十分に溢れており、マフィア稼業に手を染めた兄弟の物語のようなイメージが私の頭の中にひとりでに思い浮かんだ。

古典というものは誰も知っているが誰も読んだことがない、という名言をどこかで読んだことがあるのだが、大学に入学してからそんな常識ではダメだと決めた私は、アメリカでいうザ・ビッグ・ブックスの制覇を企てるようになった。『戦争と平和』、『レミゼラブル』、『白鯨』、『ドン・キホーテ』、『罪と罰』、『ユリシーズ』などを、登山家が心と躰をよく準備してから覚悟を決めて高山を登るように、一冊また一冊とゆっくり読み進めていった。しかし、『カラマーゾフの兄弟』だけはなぜか何回試みてもなかなか最後までは読破することができなかった。ストーリーや作品の雰囲気などに不満を感じたからではない。私は最初に読んだ『罪と罰』に魅了されていたから、ドフストエスキーの文学世界にさらに入り浸りたくての挑戦だった。でもやはりなぜかあの複雑な作品世界の複数の糸が、本に深く入るに連れて、どんどん絡んでいって、終いには作中人物の関係が全く把握できなくなってしまうのがオチだった。

どうしてこんな結果になったのだろうか。当時は気つかなかったが、今振り返ってみるとやはり問題は言葉から来ていたと思う。つまり、ここで言葉というのは、英語という言語のことだ。スペイン語圏の作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスはスペイン語の古典である『ドン・キホーテ』を敢えて英訳で読むのが相性に合って原文よりいいと感じた、と述べたことがあり、それは有名かつ滑稽な逸話として知られている。これはまた、個人の性格と言語とフィクションの三角関係に関していくらか的を射た発言だと思われる。

私の場合、最初に『カラマーゾフの兄弟』を読もうとしたのは大学生の頃で、英語圏では古典的な訳とされるイギリス人のコンスタンス・ガーネット (Constance Garnett) による英訳だった。二回目の挑戦は、21 世紀に入ってから英語圏でドストエフスキーの原文のリズムに最も近いとされるピビヤー

とヴォロホンスキー（Pevear-Volokhonski）の共訳だった。 私はロシア語は「ダスヴィダーニャ」という挨拶くらいしかできないので、以上の二つの英訳を原文に照らし合わせてその良し悪しに関して根拠をもって判断はできないのだが、世界文学の一読者――あくまでも個人としての一読者――としては納得がいかないナニかがあった。

話はそれから数年先に進むのだが、私は去年 6 月にアメリカでの博士課程の一環として中国に留学することになった。6 カ月の間ずっと一つの言語を集中的に勉強するとさすがに言語特有というべき、ある種の疲れが出るものだから、12 月になってから年末年始の学校休みに便乗して、それまで読むのを我慢していた、大きい、非中国語的なものを読もうと決めた。偶然にも、その時期にちょうど私がいる北京師範大学の図書館でロシア文学が書物展示コーナーにピックアップされていたので、それをきっかけに私のクリスマス個人プチロシア文学祭りが始まったわけだ。＜祭り＞の一冊目はトルストイの『アンナ・カレニーナ』でこれは有名なモード夫婦（Louise & Alymer Maude）の英訳で読んだが、その次はドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を日本語訳で読むことにした。この選択には訳があった。

『カラマーゾフの兄弟』の新しい日本語訳を何年か前に亀山邦夫先生が発表してかなりのブームになったのがまだ記憶に新しかったのだが、当時私は東京大学で修士論文を書いている時期だったので残念ながらリアルタイムでその訳を読む機会を逃してしまった。それ以来、いつかこの訳で読んでみようとずっと思っていた。

というわけで、クリスマス数日前に私のキンドル（電子書籍端末）に五巻もある亀山訳の『カラマーゾフの兄弟』をダウンロードして毎日行きつけのカフェに行っては腰を据えてドストエフスキーの世界に入っていった（ちなみに、余談であることは百も承知だが、このカフェはなんと韓国のチェーン店で、店内ではほぼいつも韓流のポップソングが流れる上、周りのテーブルにいる大多数のお客は韓国人で、いつも韓国語で会話している。北京にいながらにして、まるでソウルでドフストエスキーを読んでいる錯覚にも時々陥った。）

上に述べた二つの英訳のいずれの場合も、作品の第一巻辺りで挫折した。つまり、カラマーゾフ家がゾシマ長老と会談する場面である。読みかけた英訳では、登場人物たちが家族の一人一人に対して抱えている感情や距離などがどんどん読み取りづらくなり、作品の人間性よりはむしろその思想や哲学の問題が浮き彫りになったのが、あるいは挫折の原因だったかもしれないと、今になって思う。なぜかというと、私ほどドストエスキーが持ち合わせていた思想から距離を置いた考え方する者は少ないと思うからだ。ドフストエスキーの作品の登場人物や語り手自身でさえも持っている、あの熱狂的なほど強い信仰心に私は正直なところ疲れてしまうし、よく登場する共産主義者やアナキストたちの間の論争などは二十世紀の歴史を知った上だと、非常にナイーブで馬鹿げた話ばかりに過ぎないように思ってしまう。だが、日本語訳で読んだ亀山訳の『カラマーゾフの兄弟』という作品は、英訳の Novel of Ideas ではなく、正真正銘の「人間ドラマ」だった。もちろん、作品が投げかける哲学的問題やジレンマを追い払うつもりではない。が、作品の強い「人間くささ」に日本語訳を通じて初めて気づいた私は、やっと『カラマーゾフの兄弟』の世界を理解して、それに魅了された。

英語は原則として日本語よりはフラットな言語のせいか、カラマーゾフ家の会話に含意する意図が読み取りづらく、その裏にある感情も心理も多くの場合は謎だった。しかし亀山訳では、それぞれの登場人物の言葉遣いに気配りが十分に効いており、その個々の性格は私が読んできた――読もうと

してみた——英訳なんかより倍以上鮮やかで生き生きとしている。ここでは残念ながら私の興味を引いた数え切れない箇所を一々引用することはできないが、一つだけ、英訳でいつも諦めてしまった、ゾシマ長老との会談の場面から例を挙げるとするならば、次のフョードル・カラマーゾフの発言である。

> 私は根っこからのというか、生まれつきというか、要するに道化もんでして、長老さま、まあ、神がかりと同じようなもんですよ。いいわけなんぞしませんや。

カラマーゾフ家の父親の言葉遣いのようにいい加減な態度の日本語は、どんな英語よりもフョードルのふざけた性格をうまく描写しているし、その語尾の一つ一つに登場人物の性格、年齢、信仰を嘲笑する態度がすぐに読み取れる。[1]

もちろん、これはフョードルに限っていえることではなく、登場人物たちそれぞれが用いる丁寧語、敬語、謙譲語の使い分けを駆使してそれぞれの性格を映し出すことは英語という言語を用いてはほとんど真似できない芸当だと思う。家族に関する普通名詞もまた然りで、英語の Brother 一語に対して、日本語では「兄」「兄貴」「お兄様」」「弟」などかなり豊富に言い方があって、まさに兄弟の物語にもってこいの言語だと思われる。主人公アリョーシャとその兄弟たちの心理的関係が、初めて手に取るようにわかったのだった。

それだけではなく、亀山訳はその全体に劇の脚本のように、生の声の力がみなぎっている。口承文学が持つような力をすべての会話の場面に感じて、朗読したくなる場面も多かった。さらに、亀山訳を読んで、「ああ、なるほど、百年以上前に、ロシアの暗くて質素な部屋でドストエフスキー本人がちょうどこの言葉を妻に口述したわけだ」と思わざるをえなかった。もちろんドフストエスキーは実際、借金の返済に追われて時間を稼ぐために秘書を雇って小説を書き取らせたことは以前から知っていたが（そして伝記を調べると、彼はその速記者と結婚し、後々まで口述筆記を妻となった彼女にしてもらっていたという）、亀山訳を読んで初めて、時を経て、かつ違う言語で、ドストエスキー本人が登場人物たちの会話をパフォーマンスする場面が脳裏に思い浮かんだのだった。

そのパフォーマンス性のおかげか、私はこの亀山訳の『カラマーゾフの兄弟』の日本語に、英語でいう feeling という要素を英訳の倍以上も感じ取ることができた。世界文学には、時としてこんな素晴らしくも不条理な奇遇があるものである。

注

1. この引用文を私は「私は道化でした」と自称する、太宰治のあの『人間失格』の主人公の発言ともさえ共鳴していると読んでしまう。このような、思いもよらない発見こそが、翻訳を通じて作品から得られる何かだと考えるべきだろう。